朝日のあたる家

丸山健二

朝日のあたる家

丸山健二

講談社

朝日のあたる家

昭和四十五年十月二十八日　第一刷発行
昭和四十五年十一月三十日　第二刷発行

著　者　丸山健二
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号・一一二
電話・東京(九四二)一一一一(大代表)／振替・東京三九三〇
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定　価　五八〇円

0093-124382-2253(0)　(文1)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
© Kenji Maruyama 1970 Printed in Japan

朝日のあたる家

装帧　清川泰次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章

夜明けの接近につれて気温がさがる。金属製の湯たんぽは冷えて役に立たなくなり、《その男》は床のなかでますます体をちぢめる。折り曲げた長い両脚をぴたりと胸につけ、首のまわりの毛布の端を肩の下敷きにし、外気の侵入を防いでいる。鼻から吐きだされる水蒸気は、たちまち粒子のこまかい水滴に変わって、布団の一部を湿らせる。固く閉ざされた眼、粗悪な寝具に隠れた口、彼の表情は凝結している。だが、死人のように中途半端な感じではない。皮膚はなめらかで赤味を失わず、額から頬にかけての筋肉は弾力に富み、ほどよくひきしまっている。さらにまた、左眼の下のたるみにはじまって耳のほうにむかう一本の線も、生気にみちた顔を形づくっている大きな要因のひとつである。線は非常に細く、だが長いうえに鋭くもあり、初対面の者でも見落とさない程度に黒ずんだ色を有している。

片方の腕を体の下敷きにした横むきの姿勢のために、彼の顔は壁と平行している。壁には、普通の背丈の人間が手の届くかぎりの高さまで、たぶんこれまでに出入りした多くの男たちの爪によって描かれたのだろう、ひっかいた痕で埋められている。文字や記号のような痕が大半

を占め、残りはすべて意味のない直線や点や曲線ばかりである。
部屋は極端に狭い。二畳半の広さしかなく、天井さえも壁の延長に見えるくらいで、窓側の両隅は便所と机と洗面所が並んでいる。机の表面にもおびただしい痕があるが、長年使用しているあいだに自然にできたものだ。そして、机の下に、半分蓋が開きかけたダンボールの箱が置いてある。持ちこみを許可された私物——下着や雑誌や寝巻きの類——をしまっておく箱だが、しかし《その男》の場合は空っぽである。
いまや彼は、邪魔にしかならない湯たんぽを蹴って布団の外へだし、仰むけになっている。それから口元を覆っている毛布を静かに払いのけ、ゆっくりと顔を動かし、一文字に結んだ分厚い唇を冷気に触れさせる。眼はまだ閉じたままだ。だがしばらくして、開く。一、二度素早いまばたきをしたあと、上体を思いきりのけぞらせる大きなあくびをし、眼やにを指でこすり落としながら正気をとりもどしてゆき、彼は新しい一日を迎える。
鍵を使って扉を開ける音がし、廊下を足早に歩く靴音が近づいてくる。その歩き方で彼は今日の担当が誰かわかる。つづいて、建物いっぱいに拡大されたオルゴールの音が充満し、と、急激に弱まり、起床を告げる担当のしわがれた声が響く。「起床！」とくり返しくり返し叫ばれ、ふたたびオルゴールの音が高まる。
七時半である。
だが彼は、無表情と仰むけの姿勢をいつまでもつづけ、廊下の騒ぎに反応を示そうとしな

い。ただ、「起床！」の声がかかるたびに、左の頬を走る細い線をわずかにひきつらせるだけだ。規律に従おうとする素振りを見せない。

やがて、オルゴールも、吐血寸前の病人を思わせるしわがれた声も途絶え、元通りの静寂が訪れる。あまり職務に忠実ではない今日の担当は、各部屋の扉をたたきまわったり、覗き窓を開けて怒鳴りちらしたりするような真似はしない。紋切り型に「起床！」と叫んでオルゴールを鳴らしたあと、担当は足元に電気ストーブを置いた廊下の机にもどったのだろう。あるいは、間違いなく覗き窓を見てまわったのだが、朝の気分をぶちこわしたくないという個人的な配慮から、あえて無理押しを避けたのかもしれない、と《その男》は考える。

だがいずれにしても、彼には起床の時間を守る気持はない。右腕を毛布からだし、鏡を眺めるときはいつも気になる大きな唇に人差し指の先を押しあて、端から端までを計器の指針のようにして撫でる。まるで唇の長さを正確に計っているみたいに、慎重で、真面目くさった仕種である。尖った爪が唇の一方の端に達すると、すかさずまた元の端にむかって移動させ、同じことを数回試してから、いきなり口を大きく開ける。瞬間、彼の顔つきは一変する。頬の角張った線が強調され、緊張した険しい形相となり、黒々と輝く視線が痕だらけの壁を貫く。しかし、それも束の間の表情にすぎず、次の一瞬には、悄然としているといってもいいほどの、柔和な表情にもどっている。

窓側に面した建物の外を、凍てついた雪を踏みしめて、誰かが通って行く。歩調は一定でな

く、少し進んだかと思うとじきに立ちどまり、ときどき薄氷が割れるような音が混じる。そして、歩くのをやめると、水をこぼす音と低くつぶやく悪態が聞えてくる。それらの雑多な物音はひとかたまりになって、次第に彼の部屋のほうへ近寄り、外にいる人物の動作やつぶやく言葉が明確になる。職員のひとりが、凍結した水道の鉛管に熱湯をかけてまわっているのだろう、職員は、ひどい寒さと手数のかかる仕事にたいして、悪態をついている。

「出たか？」と職員は窓にむかって叫ぶ。

だが《その男》は、問いかけを無視して軽く寝返りを打ち、返答しない。すると窓の真下のあたりの壁が靴で蹴られ、鈍く重い震動が一度、二度、三度と生じる。しかし彼は、依然として沈黙と無表情を守り、人差し指の腹で唇の端から端までを撫でている。

「栓をねじってみろ！」

外から再度声がかかる。

「早く！」

職員は苛立ち、またもや壁を蹴りあげ、おまけに持っているヤカンで鉛管をたたく。一段と騒々しい催促にもかかわらず、返答は得られない。

「起きろ！　起きろ！」

職員は最後に思いきり強く壁を蹴り、それからはっきりした言葉で部屋のなかにいる男を罵り、ついで新しい熱湯をくみに帰って行く。雪を踏む靴音、水たまりの薄氷が割れる音、脚の

横にぶつかるヤカンの蓋の音……。

彼はあいかわらず横たわっており、全身を包んだぬくもりに浸って、じっとしている。唇に触れていた手を布団の下へひっこめ、眼は狭い部屋にしてはいやに高すぎる天井を見、身動きしない。

視界には部屋の上部と窓が映っているが、まだ陽が昇っていないために、影らしき影はほとんどどこにも見あたらない。天井が白っぽく見えているのは、三日前に降りつもった雪の反射光のせいである。いや、陽はとっくに昇っているはずだ。昨日のちょうど今時分には、天井に窓の形がくっきりと映っていたのだ。窓と、上下二枚の板ガラスとを十センチ間隔に区切った鉄格子の影も……。

外は曇っている。彼は心もちのけぞった姿勢をとり、窓越しに空の一隅を眺める。そして、このぶんではいつまで経っても陽は照らないだろう、と思う。つもっている雪が全部融けきらないうちに、また新しい雪が降るかもしれない。もし降ったとすると、たった半日のあいだに、窓から見渡せる風景が白一色に塗りつぶされるだろう。むろん、本降りになればの話だが。

横たわったままの彼は、健康そうな呼吸をくり返し、廊下ではじまった会話に注意深く聞き耳をたてる。

担当と轢き逃げをした男が、扉をはさんでしゃべっている。ふたりともきわめて低い声を交しているが、会話の内容はいつもとまったく同じである。廊下に立っている男の口からは、

たっぷりと同情がこめられた言葉の数々、部屋にいる男の口からは、欲情にかられた女が発するような長い長い嗚咽である。すすり泣きは毎日つづき、彼は昼も夜も泣き惑っている。日に一度は決まって面会人が訪れ、彼は面会室から帰ってくるときも泣きじゃくる。どの担当も彼にたいしては、少なくとも《その男》の場合よりは親切で、神経を使っている。

ふたりはいま、短い言葉のやりとりをやめて、それぞれの立場にもどる。ひとりは電気ストーブのある廊下の机へ、ひとりは火の気のない冷えた畳の上へと落着き、建物全体に沈黙が漂う。彼らが泣いたりしゃべったりしているあいだ、《その男》は細い線が走る左半分の顔面をゆがめて、微笑していた。しかし、右半分の顔は硬直し、無表情で、あたかも彫像か剝製を思わせる堅苦しい顔つきだった。

窓側の外を、さっき彼にむかって怒鳴った職員が息せき切って走ってくる。湯をいっぱいにつめたヤカンはあまり音をたてない。壁がどんと強く蹴られ、鉛管を伝って落ちる水音があり、しわがれた声が叫ぶ。

「栓をひねってみろ！」

だが彼は、前回と同様、返事をしようとしない。興味を失ったような眼ざしで、天井と壁が出会う個所を見あげているばかりだ。

蹴られた壁が連続して震動する。

「わからんのか！」職員はわめきちらす。「聞えねえふりをしやがって！　起きろ！　起きろ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

職員は諦め、残った水道管を片づけに行ってしまう。

数分後に、言いつけに従った轢き逃げの男が「出ましたよ。どうもおかげさまで」と言い、職員は「よし、よし」と言いながらまたひき返してくる。それから、立ちどまって、力まかせに壁を蹴りあげる。

「つんぼになったのか！　ええ？」

《その男》は身動きひとつしない。

突然ヤカンが放りだされ、外にいる職員は建物に沿って事務室のほうへ走って行く。いくらも経たないうちに、荒々しい同じ足音が廊下に響き、職員と担当の手短な会話が行なわれ、彼らはそろって《その男》の部屋へ近づいてくる。

眼の高さにとりつけられた扉の覗き蓋が開き、ふたり分の視線が一斉に飛びこむ。部屋の内部すべてを見てとろうとする眼ざしで、血走った眼球がせわしく左右に動く。

「まだ寝ているのか」と担当の声が言う。おだやかな口調である。「早く起きろ」

「ふざけた奴だ！」としわがれ声が怒鳴る。「起きるんだよ！」

《その男》は扉のほうへ顔をむけ、それから上体を起こし、ゆっくりと毛布や掛布団を払いのけて立ちあがり、首から下の体が現われる。革のジャンパーもごく太の毛糸で編んだセーターも着たままで、ズボンさえもはいている。彼はいつでもそうした恰好で眠るのだ。

肩章と腰を締めつけるバンドの装飾をほどこしたジャンパーは、色は黒で、胸と両脇のポ

ケットのほかにたくさんのジッパーがついている。ジッパーはどれも完全に閉じられてなく、動作のたびに裏地の真紅が見え、片方の襟が立っている。彼は頭をひと振りして長く伸びた髪をそっくり後へなびかせ、五本の指をつっこんでかきそろえる。

「ぐずぐずするな！」廊下のしわがれ声が促す。「布団なんかあとでたため！」

だが若者は、緩慢な仕種でまだぬくもりの残っている布団をたたみはじめ、部屋の片隅に積み重ねる。彼が敷布団に手をかけようとしたとき、鍵穴に鍵がさしこまれ、同時に廊下のふたりが扉を開けてはいってくる。はいってくるなり、しわがれ声の職員が大声で罵り、《その男》の胸ぐらをつかむ。《その男》は相手の顔へまともに視線を注ぎ、ついでジャンパーをつかんでいる手をじっと見つめる。両者のあいだに割ってはいった年配の担当が、職員の手をジャンパーからはずす。

「一人前気どりしやがって」と職員が言う。

「七時半に起きなくちゃだめだよ」と担当が言う。

「若いのを甘やかすと癖になるんだから」と職員。

「規則は守ってもらわんとな」と担当。

若者は無言で、しわだらけのズボンのポケットに両手をつっこみ、白い息を吐きながら立ちはだかっている制服の男たちを交互に見比べる。扉が開け放たれたままになっているのと、布団から抜けだした直後のために、肌が凍えそうだ。

「あれほど呼んだのに聞えないわけがないだろ！」と職員が言う。
「こいつは寝起きが悪いんだ」と担当が弁解でもするみたいに言う。
「何度も壁をたたいたんですがねえ」職員は壁を蹴ったとは言わない。「ちゃんと聞えていたはずですよ」
　職員はつづいて、罰則について担当に持ちかける。若者の耳にも届くようにと、大声で、熱心に幾度も幾度も加える罰を強調する。彼の執拗な努力にもかかわらず、担当はまともに聞こうとしないで、早くも事態の収拾に気をとられている。
「とにかく明日からは時間通りに起きろ」と担当は言う。「そんな態度でいるといい結果にはならん」
「栓をひねってこい」と職員が言い、若者の右肩を小突く。「さあ、やれ！」
《その男》は、靴下をはいた足を畳に固定し、背後の壁にもたれると、ポケットからひき抜いた両手を胸の上に組む。そして彼は、ふたりの制服の男を静かに見つめる。
「早くひねってこい！」と職員が言う。「早く！」
「そんなに強情をはるもんじゃない」と担当も言う。「おまえの使う水なんだから」
　ふたりは半歩ほど前に踏みだすが、それ以上《その男》に近づこうとはしない。ただ、職員のほうがわずか十センチばかり余計ににじり寄っただけだ。
　廊下の窓も開けてあり、風に似たゆるやかな空気の移動を彼は感じる。ジャンパーを着てい

ても寒い。

「なんだってそういちいちたてつきたがるんだろうな」と、遂に担当が短い沈黙を破って言う。年配者の彼は、窓側の端まで進み、蛇口に手をかける。「こうすりゃいいんだよ」

蛇口がきしみ、水が少し流れ、次には平常通りの勢いでしぶきが飛び散る。担当は栓をひねって水をとめ、腕時計を見やり、扉へむかう。すると職員は素早く《その男》の耳に口を近づけ、捨てぜりふとも威嚇ともつかない言葉をささやき、担当につづいて廊下へと出て行く。

扉が閉じて、若者の視界から廊下の空間が消え、鍵がかけられる。

制服たちは別れる前に立ち話をしている。手ぬるいという意見にたいして、もうじき別の場所へ移されるのだからという説明が応じる。「どうせあと半月もいないよ」「でも——」「ここでかまわなくたって、あっちで思い知らされるだろう」話がすんで、ふたりは正反対の方角に別れる。職員は表玄関の横にある事務室へ、担当は電気ストーブを下に置いた机へと帰り、朝の些細ないざこざは十五分間で幕を閉じる。

彼は、たたんで積み重ねた布団のあいだに両脚を膝までの深さにさしいれ、眠っていたときのように仰むけになる。ジャンパーをたくしあげて、セーターと下着の裾を下へひっぱり、腕を頭の下敷きにする。彼は空腹に気づき、それから朝食のあとに訪れる今日の予定——これまでの日々とは異なって、ちょっとした変化が生じるかもしれない予定——を思いだす。だがその予定にしても、格別の興味をひくような出来事にならないのは、はじめない前からわかって

いる。たしかに広々とした部分で少くとも数人の男たちといっしょに過せる何時間かではあるが、暖房が利いている点をのぞくと、ほかはとるに足らない。むしろ、きのうのように、一日中寝そべっていたほうがいいくらいだ、と彼は思う。しかし、十時になれば、いやおうなしに先方の指示に従わなければならない。

扉のむこうに耳慣れた一連の物音があり、壁をくり抜いた四角い穴から次々に食器が押しこまれる。彼は、布団に脚をはさんだ姿勢で上体と腕を伸ばし、穴から合成樹脂でできたふたつの椀と箸をつかみとり、腹這いになる。湯気はたち昇っていても、調理場から運ばれてくる途中で冷めている。事実、口にしても温かくない。

ひとつの椀を別の椀に傾けて汁と飯を混ぜ、麦粒を見ないようにして一気に胃袋へ流しこむ。咀嚼をしないので、歯の音は弱々しい。しかし、残りが三分の一までに減ったとき、彼は急に顎を動かしはじめ、味わうようにして食べる。箸の先端にすくいとった麦飯をじっくりと観察し、まるで惜しむみたいにちびちびと食べる。稀薄な湯気もすでに消え、汁もいまでは水道の水と変わらないまでに冷えている。

食べ終えると彼は、空っぽになった椀の底をじっと見つめ、箸をしゃぶり、元の四角い穴に食器を返す。後頭部と背中を壁にあずける。壁は幾分湿っていて、えり足に痛みに近い寒さが走り、思わず前かがみになる。彼の左の頬にある線がゆがむ。

窓の外にある光の量は、八時になっても夜明けのときと同等である。冬の厚い雲が相変らず

全天を埋めつくしている。雪はかならず降るだろう。

彼の坐っている位置から見える外の景色といえば、葉がついていない灌木の梢と、灰色とも白とも黒ともつかない色合いをした狭い空間だけである。黒々とした裸の小枝が、まったく揺れ動かず、ほぼ均一な間隔をとって腊葉のように空に貼りついている。もっとも、太陽の出現によって気温が急上昇し、唐草模様に凍てついた窓ガラスの氷が融けると、梢のほかに二本の幹と隣接したレンガ造りの建物の角が見えるだろう。

彼は、鉄の格子と窓ガラスを通して、狭い空間に固定した小枝の様相を眺める。まもなく、梢全体が一種のリズムを刻んで、上下に揺れる。彼の視界へ新しく飛びこんできたのは、一羽、二羽、三羽、合計四羽の雀である。絶えずさえずりを交し、四羽だけとはとても信じられない賑やかな騒ぎをまきちらしている。めまぐるしい機敏な動作、しょっちゅう小首を半転させ、きちんとそろえた足は横這いをくり返す。しかし、飛びたってどこかよそへ行こうとはせず、いつまでも同じ梢に群れている。雀たちがいったいなにを目当てに待っているのか、彼にはわかっている。轢き逃げの男が窓から投げ与える残飯を待っているのだ。彼はここへきてからたった三日目に雀を手なずけてしまった。

さえずりがひときわ高まって、四つむこうの部屋の窓が開き、つづいて下手な口笛が吹かれ、ふたたび窓が閉められる。同時に梢が大きく揺れ、雀は一斉に枝を離れて姿を消す。あとには小枝のかすかなリズムが残り、やがてそれもおさまって、風景は額縁のない絵、または引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.